

---

# きっと君に会いに行く

坂元 研斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつと君に会いに行く

### 【Nコード】

N5429J

### 【作者名】

坂元 研斗

### 【あらすじ】

ある日、少年は記憶を失った。  
過去にあったすべての記憶を。  
記憶を取り戻しながら、高校2年生になった少年は、どうするか。

過去に何があったのか。未来には何があるのか。  
それは、誰にもわからない。

一応、恋愛要素が入ってきます。

## プロローグ（前書き）

正直下手ですが読んでみてください。  
お願いします。

## ブローグ

人々は、常に何かを求めている

でも、それが何かは誰も知らない

目に見えるのか見えないのか

さわれるのかさわれないのか

何一つわからない

それでも求め、探し続ける

そうして、誰かが手に入れ、ずっと持ち続ける

それは、とても長い時からなる今

そして、未来

だが、反対に失う者もいる

それは、硝子が割れるように一瞬であり、今

そして、過去

取り戻せない、過去

目に映ったのは、白い天井だった。

独特な薬品のおいのせい、それとも独特な形をした水色の服のせい、それとも白一色の部屋のせい、何を見た時点で判断したかは分からないが、俺の腕に突き刺さるチューブとその先にある点滴を見ればここがどこかなんて、明白だった。

ここは……病院だ。

俺はゆっくりと上半身を起こし、周りをもう1度良く見渡す。めざましい発見はなかったが。

桜の枝の入った花瓶。発見はそれくらいだった。その花瓶に桜をいけたのが、家族なのか、親戚なのか、友達なのか、今、俺はそれ

を知る術は持ち合わせていない。

しかし、改めてここが病院だということは確認することはできた。窓から正面玄関の赤十字が見えてしまったのだから、病院という選択肢の他ない。

それにしても、俺はなぜ、こんなところにいるのだろうか？

……

駄目だ。思い出せない。

自然に腹に手を置く。その時だった。俺の手に入院服ではない力サリとした感触が伝わった。偶然の産物とは違うが、俺は、偶然にも入院している原因を見つけた。

腹にはぐるぐると包帯が巻かれていた。

だが、それを見つけても、腹にある何かの怪我もしくは病気になった理由は思い出せない。本当に、何があったのだろうか……。

さて、目が覚めたのだがこれからどうすればいいのかわからない。とりあえず、手元にあるナースコールで医師を呼んだほうがいいのかもしれない。少なくとも、勝手に動くのはご法度だ。

んで、マジでどうするかと悩んでいた時、

「あっ……」

小さなつぶやきが聞こえた。

反射的にそちらのほうへ首を向けると、スライド式の扉が慣性に従いわずかにローラーを滑らしている。

そして、紺色のブレザー（おそらくどこぞの学校の制服）を着た少女が立っていた。

それも、美がつくほどの少女だった。

つか、誰！？

「あっ……あっ……」

いやいや、呻いてないで誰か教えてくれ。声に出してないから伝わるはずないけどね。

「お兄ちゃん……」

君が！？って、んなわけねえよ！少女だって……！

って、魚っじゃない、うおっ！？突然、飛びつくな！who、誰が（少女が！）what、何を（だから、飛びつきを！）when、いつ（だから今！）where、どこで（ここ以外の選択肢を教えてください）why、なぜ（知るか！）how、どのようにして（泣きながら、しかし、顔は笑顔であり、歡喜に満ち溢れ、そのうえでさらに俺への……以下略！）まさに、5W1H（5つ分からず1人呆ける）いや、分かってるから！！それに意味分からんそして、違う！こんなことを言いたいんじゃないんだ信じてくれよ！！もお、自分が自分で訳分からん！！はい！！！！

まあ、何にせよさっきの「お兄ちゃん」というセリフからしてみても、この飛びついてる（推定身長146・3センチの）少女は俺の妹となるのだろうが、俺に妹なんていたのだろうか？

それと、君。頼むから泣かないでくれ……

「お兄ちゃん、大丈夫？頭痛くない？気持ち悪くない？ご飯食べてる？」

聞いちやいねえし、質問を連射すんな。

それでも、質問を無視することはできないので、一応「大丈夫」とは言っておくが、それを聞くや否や0・3秒、少女は「お医者さん呼んでくる」と駆け出した。

転ぶぞ。あと、病院内を走るんじゃないやめせうん。

「はい」

素直でよろしい。まっ、忙しいほかないな。それに、ナースコールがありますよ。

で、結局、俺の妹だったのかどうかは確かめられなかった。

近所の子、という選択肢もあるが、わざわざ見舞いには来ないだろう。

なら誰だ？というか、思い出せないんだから自問自答しても意味ねえって。あゝ、くそっ。なんも思い出せん。

ん？何も……思い出せない……？

……

あれっ？そういえば、あの子が誰とか以前に俺……誰だっけ？

……

……

……

状況を把握するのにたつぷり10秒。桜の花の香りも借りて何とか把握。

気が遠くなるような気がした。

「何の冗談だよ……これ……」

嘘だろ！??

俺の動揺が混じりこんだ声は、純白な閉鎖的空間に霧散した。

重度の記憶障害。 名称：記憶喪失。

基本的生活の仕方などを除き、現在よりも前。 患者が目覚めます以前の記憶がすべて末梢されていると思われる。

原因は腹部に傷を負った際に発生した激痛、もしくはその後、転倒し頭部を強く打ちつけた時の衝撃によるものと思われ、頭部にあった傷からして後者のほうの可能性が高い。

思った通りだった。やはり、俺は、記憶をなくしている。おいおいおいおいおい、ホント何の冗談なんだコレ……？

すべての合点がいった。俺がここにいる理由が何一つ思い出せないのも、妹であるはずの少女のことが分からなかったのも、自分自身の名前が分からなかったのも、すべて。あたりまえだよ……俺には過去がない。過去がないのに過去のこと分かるはずもない。だが……。

俺は……これからどうすればいいんだ？

……

なぐんてね。

最初こそ動揺したが、考えてみれば俺が悩む要素なんてない。記憶喪失、ショックですか？いえいえだってさ、記憶喪失って言われても、記憶なくしてますし、過去の記憶を持ってた記憶も一緒になくしてますから、記憶喪失なんて自覚ねえし悩めと言われたところで困る。

それに対して妹は俺に起こった災難を聞いて蒼い顔をして、再度泣きだしてしまい。俺は再度どうすればいいのか対応に困ってしま



った。約5分間、医師は沈黙しこちらを眺めていた。

あくまでこれは推測だが、俺、妹、医師の三者がそろったあの場所が一番ケロッとしていたのは俺だろう。だから、医師から記憶喪失であると伝えられたときの俺の第一声は

「あつ、やつぱりそうですか」

医師も看護師も診断結果を伝えるときは深刻そうな顔をしていたし、妹も前述の通り。むしろ、記憶をなくしている不憫な青年の第一声に皆もそろってマヌケ面をさらしてくれた。別にいらないけどね。

その後、白衣をまとったお方がこの後どうすればいいのかを丁寧に説明してくれた。

ありがたい。話のうち97・91パーセントはしっかりと真つ白な記憶に余韻すら残さず消えてくれた。残りの2・9パーセントは刻み込まれたが、それは、普通の生活をしていれば次第に戻ってくる。という部分のみだ。

ちなみに、ほとんどが新しい過去として刻み込まれなかった話を聞いている（ふりをしている）間に何をしていたかというと、医師である白ひげを生やしたおっさんは、クリスマススイブに夜な夜な世界中の家に不法侵入を繰り返し、何も取らずによい子にだけプレゼントを与えるという差別的な行為をしているのにも関わらず、通報どころか目撃証言すらない、怪盗に永久就職でもしたらどうかと勧めたくなる赤服の不審者の役をやらされそうだとか、どーでもいいことを考えていた。

しかし、もし、怪盗に永久就職したら、ルパンやキッドといい勝負だと思っぞ。

平成のシャーロック・ホームズならぬ平成に現れた第二のルパン。かつこいいじゃないか。代わりに子供たちの夢と希望と憧れと信頼を失うだらうけどね。

はい！ずいぶん話がそれってしまった。

で、俺はあと1週間入院して問題がなければそれで退院できるそうだ。それと、皆、忘れているかもしれないが、俺が入院している原因はあくまで腹の傷である。

そういえば、この腹の原因はなんなんだ？悪いが教えてくれないか？

俺は、ただ単純に気になった。だが、返ってきた返答は想像もしていなかった。冗談でもなければ考え付くはずもない。

医者も看護師も妹も、いや、その空間そのものが記憶喪失を告げられた時よりも重かった。

「あなたは……3週間前」

通り魔に刺されたんです。

……人はこういふときどんな反応をするんだろう。きっと、俺に限らず俺と同じ状況になった人がいるならば10人中10人が同じことを思い、同じ反応をするのではないだろうか。

この時、何を言われたのか、理解できなかった。

2

これは、1週間前のこと、つまり、今はもう退院して、病院から家へ帰るタクシーの中にいる。

妹は、心から祝福してくれた。心からの笑顔で本当に心から。

同じように俺は確かにうれしかった。だが、はつきり言って複雑な心境でしかない。勝手に俺がいろんなことを考えているだけなのかもしれないがこの1週間、俺が刺された理由を考えていた。考える必要はなかったのかもしれないけれども考えずにはいられなかつ

た。

ただ単純に、刺されただけなのか、通り魔に何の理由もなくやられただけなのか？それとも誰かが明確な殺意を、敵意を持ってやったのか。

それは、いくら自問自答したところで答えなんて出てこないが今の俺はみじめだ。それは分かる。みじめでしかない。

近くにいた奴を頼らなきゃ何1つ、事実をつかめない。

知りたくても、知ることができない。これをみじめ以外になんて言えはいいのだろう。

「お兄ちゃん!!」

「うわっ!？」

果てしなくでかい妹の声だった。

「何ボクッてしてんの？着いたよ？」

ああ……すまん。

そうだ、なんだかんだ言っても過去よりも今をどうにかしなければならん。俺はこいつの兄貴なんだ。しっかりしなきゃな。

妹に続くようにタクシーを降りれば当然家が目に入る。俺の家らしい家が。

まあ、何と申しましようか……見事な一軒家だった。一体、何年ローン組んでるのだろう……。親は一体何者か？曲者か!？

ンな訳ねえって。

何いってんだ俺。

ついに、脳までおかしくなったか？まっ、もうおかしくなってるんだけどね。実際記憶喪失って言うことになってるんだけどね。よって何もできないし、笑うことしかできないし、親が何者かなんていったところでそれを調べるすべ何ざ……聞くっていう手があるけど……、妹から聞くことはできてもこの（妹にとって）かなりの一大事兼悲しいことが起こっている時にそのうち顔を拝むことになるだろう親のことなぞ聞くよりも他に聞くべきことがあるだろう。よ

って、今は聞くべきではない知りたければ相手の脳の記憶を覗く超能力でも使えばいい。俺が持っているかと問われればこの世に存在する人々の多く（常識的に考える範囲で）いないだろうと思う。少なくとも俺は持ち合わせていないし、いないだろうではなく、ほぼ確実にいない。

だから、こんなことはどうでもいいんだよ。って自分から話し出してんのにいつてるんだろうね。ほんとにおかしくなっちゃったか（障害者のな意味で）？

さて、では俺は今この状況でいつたい何を、聞くべきなのだろうか？

っと、そう言えば……。

「なあ」

俺は、決死の想いで妹に話しかけた！！ちなみに、なぜ決死の想いであつたかと言えばとても重い話であつたというべきではなく、果てしなくマヌケかつ恥ずかしかったからである。俺はこの一週間、つまり妹と初めて会つた（感覚的に）からとても大事でごく一般的に記憶喪失になつたら一番に来るはずにことを忘れていたのだ。とはいえ、はじめは俺も思っていたのだ。しかし、いつの間にか後でいつかの事になり自然消滅していた。できれば過去に戻ってやり直したい。

そこまで思うほどのこととはいつたい何なのか……それは！？

「お前の名前って結局なんだ？」

うん！マヌケとしか言いようがない！！改めて、いや、もう一度確認のために言っておくが、俺とこいつは出会って一週間である。

「ああ、やっぱり言つてなかったっけ？」

気づいてたなら言えつて妹！なんで言わねえんだよ妹！てかいつから気づいてたんだよ妹！さっさと言えよ妹！

「えーとね……私は鈴音、お兄ちゃんはそのまま名前と呼んでたよ」  
ああ……そうか、全然、思い出せんがそうなんだな。鈴音は、俺

の嫁……。いやいや、違う！何てことを考えていたんだ俺は。今の発言は前後の文とまったくかみ合っていないし、ちよつとどこかリアルにやばいぞ。妹だぞ！あの娘は妹だぞ！何てことを考えているんだ！（二回目）

これまでの会話から関係は悪くなくむしろ良好であるとわかったのだが……。こんなこと言つててさらに先に進んでみる、俺に彼女ができたら（まあ、いないだろうと仮定して）ヤンデレ的なことになり、殺され……。る訳ねえよ。

そう、そうして俺は気がついた。なぜ俺は、ヤンデレなぞというワードを覚えているのかと……。

そうして、俺は感覚的には初めてとなるのだが、懐かしきとも言っておこうしばらくぶりの我が家での生活が始まった。始まって約15分で何を言っているのやら……。ちなみに俺がこの15分の間に思い出したこと（誰かに聞いたことは除く）はヤンデレという現代でさえ知らない人がいるいろんな意味でやばい単語を覚えていくということだ。この単語の意味が知りたい人は自分で勝手に調べてくれ、あまりお勧めしないがな。

はたして、この一週間に何度この言葉を発しただろうか？

俺は本当に何者なんだ……？

で

俺は今、鈴音に家の中を案内してもらっている。何度も言うようだが、記憶からしてみればこの家に来るのは初めてである。体は覚えていたとはこのようなことを言うのだろうか、なんとなく、すぐにどこがどこだか覚えられ、説明途中にトイレに行きたくなった時、まだ説明されていない扉に手をかけそこがまさにトイレだった。偶然であるとも考えられるが、おそらくそれはない。俺は扉を開くとき、ここがそれであるという確信持っていたからだ。

なぜ、と問われれば何ともいいがたい。

ならば俺は何と言うべきか……。

よし！！決まったぞ。はつきりと言わせてもらおう……  
「なんとなく！！」と。

しかし、鈴音はその微妙な変化というか、なんと申しましようか……そんな様子に気づく様子はなかった。まあ、前はそれが普通だったのだ。ある意味、当然というべきだろう。

その後、俺らはリビングに戻り、ごく普通の一般家庭と同じであるうやんわりとした時を過ごした。とはいえ、記憶喪失であることに変わりはなく、それ関係の話題しか持ち合わせていないため、うまく会話をつなぐことができない。今のところ交わした会話は……。

「何か思い出した？」

「いいや、なんも。」

……だけである。

それから、リビングにたどりついてから、この空間、この家には、沈黙が続いている。正直言っているんですか？つらいです。空気重いです。とってもとっても重いです。もう嫌です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5429j/>

---

きっと君に会いに行く

2011年1月27日12時57分発行